

日本語の指小辞「コ」について — エウエ語との対照 —

皆島 博 (福井大学)

キーワード：日本語、エウエ語、指小辞、文法化

1 はじめに

本論では、「子」「小」と表記される日本語の指小辞「コ」とエウエ語¹の指小辞 *-ví* の意味・用法について、「文法化」の観点も含めて、対照言語学的考察を行う。「指小辞」(diminutive)²は、名詞や形容詞などの形式に付いてそれらの形式が指す事物が「小さい」こと、あるいは、その形式の表す性質程度が「弱い」「軽い」ことなどを意味する派生接辞のことで、日本語やエウエ語のみならず、ロマンス諸語やスラヴ諸語をはじめとする世界の諸言語に広く見られる接辞³である。

日本語の「コ」とエウエ語の *-ví* (< *vi'*) は、両者とも元来は「子供」という意味の語彙的語であったが、メタファーやコンテクストに応じて引き起こされる再解釈により、元の意味よりも幾分抽象的な意味を担った指小辞へと変化するというプロセスを経ている。このようなプロセスは、「文法化」(grammaticalization)⁴と呼ばれるが、これは具体的な語彙的意味を

¹ エウエ語 (Ewe; 現地語での発音は [éβé]) とは、西アフリカのガーナのヴォルタ川とトーゴのモノ川の間接地帯の南岸に住む一部族、エウエ族の言語である。系統的にはニジェール・コンゴ語族のクワ下位語群に属し、話し手人口は、ガーナに約 100 万人、トーゴに約 75 万人いる、と報告されている (Katzner 1975: 297)。

² 「指小辞」の定義については、亀井・他 (1996: 638)、Matthews (1997: 97)、Trask (1997: 69) などを参照。

³ Jurafsky (1996)、亀井・他 (1996: 638)、中尾 (2003 : 220) など参照。

⁴ 「文法化」の定義については、Hopper and Traugott (1993: 1-2)、亀井・他 (1996: 1193)、Matthew (1997: 151)、Trask (1997: 99) などを参照。なお、「数」「格」「性」「人称」といった文法範疇がある言語において義務的な範疇として確立していくことも「文法化」と呼ばれることがあるが、ここではこの意味における「文法化」は考慮に入れない。

担っていた形式が何らかの原因で時間の推移とともに抽象的な意味を担った文法的形式へと変化していく現象⁵のことを指す。「子供」という意味の名詞を語源とする日本語とエウエ語の指小辞は、その意味・用法の一部において次のような見事な対応を示す (Heine *et al.* 1991:79)。

- (1) Japanese: ヨーロッパ人の子(コ)
 Ewe: yevú-ví (Heine *et al.* 1991: 79)
 European-child 「ヨーロッパ人の子; 若いヨーロッパ人」

- (2) J: 石 / 小石 (コイシ)
 E: kpé 「石」 / kpé-ví 「石の子; 小石」 (Heine *et al.* 1991: 79)

ただし、次のような例においては、日本語の「コ」とエウエ語の -ví は、必ずしも一対一の対応を示すわけではない (Heine *et al.* 1991: 79)。

- (3) J: 金持ち / 小金持ち (コガネモチ)
 E: keisintó 「裕福な者」 / keisintó-ví 「本当の意味で裕福ではない者; 成金」
- (4) J: 貧乏人 / *小貧乏人 (コピンボウニン)
 E: amedáhe 「貧しい者」 / amedáhe-ví 「本当に貧しい者; 哀れな者」

このような事例を踏まえて、本論では、対照言語学的考察を通じて、日本語の「コ」とエウエ語の -ví との間の意味・用法における類似点・相違点を文文化の観点も含めて明らかにしていくことになるが、本論は次のように構成されている。まず、第1節では、日本語の指小辞「コ」の意味・用法について概観する。次に、第2節では、エウエ語の指小辞 -ví の意味用法について概観しつつ、日本語の「コ」との比較・対照を行い、意味論的な普遍性についても考察するつもりである。なお、本論で使用するエウエ語の用例のデータは、すべて Heine *et al.* (1991) の記述に基づくものである。

⁵ 語彙的な意味を持った要素が、抽象的な意味を持った要素へと変化していくことから、「意味の漂白」(semantic bleaching) という言い方がなされることもある。

2 日本語の「コ」の意味・用法

2.1 日本語の3種類の「コ」

はじめに日本語の指小辞「コ」の意味・用法を記述するにあたり、「コ」を次のように3種類の形態素に区別しておくことにする。

- (5) a. コ1: 接頭辞としての「子-」⁶
 b. コ2: 接尾辞としての「-子」
 c. コ3: 接頭辞としての「小-」

まず、(5a)の接頭辞としての「コ1」(子-)は、例えば、「子犬」「子猫」のように、名詞の前に付けて用いられ、基本的に「主要部となる名詞と親子関係にあるもの」という意味を表す。次に、(5b)の接尾辞としての「コ2」(-子)は、名詞や動詞の連用形の後に付けて用いられ、例えば、「振り子」「売り子」のように「~するもの」「~する人」という意味を表す。最後に、(5c)の接頭辞としての「コ3」(小-)は、例えば、「小銭」「小高い」「小突く」などのように、名詞・形容詞・形容動詞・動詞の前に付けて用いられ、主要部となる語に対し「小さい」「細かい」「程度が軽い」などの意味を添えるが、接頭辞としての用法しかなく、接尾辞としては用いられない。

ここで、「コ1」(子-)と「コ2」(-子)については、語彙的語「子」から派生してきたものである、と考えるほぼ間違いなさそうであるが、「コ3」(小-)については、語彙的語「子」から派生してきた接頭辞である、と考えるには語源的に問題があるようである。すなわち、「小-」は、「子」と発音が同じであり、意味的にも近接していることから、語彙的語「子」が意味的に抽象化されてゆき、文法化された度合いが比較的高い「小-」という接頭辞が派生してきた、と考えることはさほど不自然ではないと思われるが、『和訓栞』には、「コ(子)の義から[派生した]か(?)」(『日本国語大辞典』、1974年)という語源説の記述があり、しかも、これに確固とした証拠はないようである。したがって、このことも考慮して、本論では、「子」と「小」を別個の語彙素から派生してきた形態素⁷として扱う

⁶場合によっては、「仔」「児」などと表記されることもある。

⁷「子」と「小」が同源であることが証明されさえすれば、日本語の「コ」もエウエ語の名詞 *vi'* とほぼ同列の概念上の拡張を経てきた、と考えることができるかもしれない。

ことにする。

2.2 「子」の意味の拡張

上で述べたように、「子」と表記される指小辞には接頭辞および接尾辞としての用法がある。ここでは、接頭辞および接尾辞としての「子」の意味の拡張について用法別に見ていくことにする。

2.2.1 接頭辞としての「子」

接頭辞としての「子-」は、語彙的語「子」から派生してきた形態素であるが、語彙的語の「子」が第一義的には人間の「親」に対する「子供」、すなわち「子孫」という意味で用いられるのに対し、接頭辞の「子-」の場合は、人間の「子孫」というよりもむしろ、動物の「子孫」を指すのに用いられることが多いように思われる。

- (6) a. 子犬(コイヌ)
- b. 子猫(コネコ)
- c. 子馬(コウマ)

接頭辞「子-」が「人間」に対して用いられるものとしては、次のような例がある。

- (7) a. 子分(コブン)
- b. コギャル(子ギャル)

上の(7a)については、「親分」(オヤブン)という対義語が存在することからも明らかであるが、実の親の如く面倒を見てくれる人物に実の子供の如く従属する者、すなわち、主従関係における「従属」という意味で用いられる。(7b)は俗語的な表現で「(高校生ぐらいの)若い女の子」ほどの意味で用いられるが、「子分」とは異なり、「*オヤギャル」(親ギャル)という対義語は存在しない。しかし、「マゴギャル」(孫ギャル)という表現が存在するので、若い女の子の年齢差を「親 子 孫」という親子関係に見立てて区別しているのであろうと考えられる。したがって、「子ギャル」場合の「子」は、「(より)若い」という意味を表している。

「人間」や「動物」以外の「植物」⁸に対して接頭辞「子-」が用いられる場合、それは元になる何かから新たに分かれ出で生じたもの、すなわち「派生物」といった意味を主要部の名詞句に添える。

- (8) a. 子株(コカブ)⁹
 b. 子芋(コイモ)

(8a)には「親株」(オヤカブ)という対義語が存在するので、植物の「株」を人間の親子関係に見立てていることがわかる。(8b)にも「親芋」(オヤイモ)という対義語が存在するので、やはり植物の「芋」を人間の親子関係に見立てているということがいえる。

「人間」「動物」「植物」以外の「無生物」に対して接頭辞「子-」が用いられる場合、それは中心になるような主だったものに対して、それに附属したり、依存したりするもの、すなわち「従属」といった意味を主要部の名詞句に添える。

- (9) a. (親子電話の)子機(コキ)
 b. 子会社(コガイシャ)
 c. 子見出し(コミダシ)

上の(9a)(9b)(9c)には、それぞれ「親機」(オヤキ)、「親会社」(オヤガイシャ)、「親見出し」(オヤミダシ)という対義語が存在することからも明らかのように、いずれも親の如き実体に子の如く従属しているもの、すなわち「従属」という意味を表す。

最後に、次のような例では、大小相対するもののうちの小さな方、すなわち「小さい」という意味を主要部の名詞句に添える。

- (10) 子羽(コバネ)

上の(10)にも「親羽」(オヤバネ)という対義語が存在するが、これはハチ・セミなどの羽のうち、後翅の小さい一対を指すのに用いられる表現で、この場合は「親子関係」が「主従関係」というよりもむしろ、「大小関係」に指示関係がずれている。

⁸「植物」にかかわる「子種」(コダネ)という表現もあるが、これは「子を生むべき元；精子」といった比喩的な意味合いで用いられている。

⁹証券取引における株式の「新株」の意味もあるが、ここではこの意味は考慮に入れない。

このように、接頭辞「子-」は、それに後続する語句の意味成分(=コンテキスト)に応じて、接頭辞としての意味も次のように変化すると見える:

後続する語句の意味	接頭辞「子」としての意味
「人間」	「従属」
「動物」「植物」	「若い」「幼い」「派生」
「無生物」	「従属」「小さい」

2.2.2 接尾辞としての「子」

接尾辞「-子」は、基本的に「子供」の意味¹⁰を表すので、「若い」「子孫」という含意もあるが、名詞に付くと、特にその名詞が指す状態・性質にある「子供」であるという意味を表す。

- (11) a. ちびっ子 (チビッコ)
 b. 一人っ子 (ヒトリッコ)
 c. 駄々っ子 (ダダッコ)

接尾辞「-子」が年少の、幼い人間を指すのに用いられる場合、次の例が示すように、特に「甘えた」「甘えん坊の」「幼稚な」というニュアンスを帯びる場合がある。

- (12) a. おじいちゃん子 / (オジイチャンコ)
 b. ママっ子 (ママッコ)

さらに、接尾辞としての「-子」が、地名、時代名などに付けられると、次の例が示すように、その場所や時代に生まれ育った人であることを表す。

- (13) a. 江戸っ子 (エドッコ)
 b. 博多っ子 (ハカタッコ)
 c. 大正っ子 (タイショウウッコ)

また、「-子」が動詞の連用形(あるいは名詞)に付くと、次の例が示すように、ある特定の状態にある人の意味を表す。

¹⁰店子(タナコ)という表現は「借家人」ほどの意味で用いられるが、大家(オオヤ)との関係を親子関係に見立てた比喩的な表現と言える。

- (14) a. 申し子(モウシゴ)
 b. 落とし子(オトシゴ)
 c. 売れっ子(ウレッコ)

上の(11)(12)は基本的に「子供」を指すが、接尾辞「-子」に先行する名詞などが表す気質・性質・属性を備えた者であることを示す。これに対して、(13)(14)は、必ずしも「子供」を指すとは限らないが、ある種の気質・性質・属性を備えた者、ある土地・時代に生きる者によく見られる気質・性質・属性を備えた者、あるいは、ある特定の状態にある者を示す。この意味で、(11)~(14)は共通の意味を共有している。すなわち、ある特定の気質・性質・属性を備えた者が示す「典型的な行動様式」である。

また、次のような場合は、接尾辞「-子」が名詞や動詞の連用形に付いているが、ある仕事に当たる者、ある職業にある者、すなわち、(ある職業への)「従事者」の意味を表す。

- (15) a. 勢子(セコ)
 b. 馬子(マゴ)
 c. 売り子(ウリコ)

上の(15a)(15b)(15c)に関連して、次のような例における接尾辞「-子」は、現代の日本語ではあまり用いられないが、特に、その職業の「従事者」が若い娘や女性である、という含意がある。

- (16) a. 踊り子(オドリコ)
 b. 縫い子(ヌイコ)
 c. 針子(ハリコ)

ある個人の名前が「子」で終わっている場合は、その名前の持ち主は、ほとんどすべて女性¹¹であるが、これは上の用法と関連性があるのかもしれない。実際に、次の例が示しているように、接尾辞「-子」が親族・身

¹¹古くは男女にかかわらず、「中臣鎌子」「小野妹子」「蘇我馬子」のように人名や人を表す語に付けて用いられた。なお、平安時代以降、明治の頃までは身分の高い女性の名に用いられた。

内などを表す名詞などに付く場合、「親愛」「愛情」「愛着」といった意味、すなわち「親愛の情」という意味を添えることがある。

- (17) a. 娘っ子(ムスメッコ)
 b. 甥っ子(オイッコ)
 c. 姪っ子(メイッコ)

最後に、接尾辞「-子」が特に動詞の連用形に付く場合、次の例のように、その動作を行う「道具」「用具」「部品」などの意味を表すことがある。

- (18) a. 振り子(フリコ)
 b. 背負子(ショイコ)
 c. 呼び子(ヨビコ)

このように、接尾辞「-子」は、それに先行する語句の意味成分(=コンテキスト)に応じて、接頭辞としての意味も次のように変化すると見える：

先行する語句の意味	接尾辞「子」としての意味
「人間」「場所」「時代」	「典型的な行動様式」
「動作」	「従事者」「道具」
「親族・身内」	「親愛の情」

2.3 「小」の意味の拡張

すでに述べたように、接頭辞「小-」には拘束形態素としての用法しかない。ここでは接頭辞「小-」の意味の拡張について見ていくことにする。基本的に接頭辞「小-」は、「人間」を含意する名詞に付くと、次の例のように、それが「小さい」「若い」ものであることを表す。

- (19) a. 小人(コビト)
 b. 小男(コオトコ)
 c. 小童(コワツパ)

接頭辞「小-」は「人間」以外の「動物」や「生物」などを表す名詞にも用いられ、次の例のように、接頭辞「小-」が付いた名詞が「小さい」「若い」ものであることを表す。

- (20) a. 小鳩(コバト)
 b. 小象(コゾウ)
 c. 小鮒(コブナ)

ただし、接頭辞「小-」が「人間」に対して用いられる場合、「小柄」「小型の人間」という意味ではなく、次の例のように、「重要でない」「大したことがない」「取るに足らない」というネガティブな意味を表すことがある。

- (21) a. 小者(コモノ)
 b. 小役人(コヤクニン)
 c. 小商人(コアキンド)

接頭辞「小-」が「人間」「動物」などの「生物」以外の「モノ」すなわち「無生物」を表す名詞に対して用いられる場合には、次の例のように、その「モノ」の量・程度・規模が「大きくない」こと、すなわち「小さい」「小型」「細かい」「わずかである」ことを表すのに用いられる。

- (22) a. 小石(コイシ)
 b. 小刀(コガタナ)
 c. 小太鼓(コダイコ)

接頭辞「小-」は「無生物」以外の「自然現象」について用いられる場合がある。この場合、次の例のように、その現象の程度・規模が小さくないことを表し、それぞれ「大」で始まる対義語が存在する。

- (23) a. 小雪(コユキ) 「大雪」(オオユキ)
 b. 小雨(コサメ) 「大雨」(オオアメ)
 c. 小降り(コブリ) 「大降り」(オオブリ)

接頭辞「小-」は形容詞・形容動詞に対しても用いられる。この場合、次の例のように、それらの形容詞・形容動詞が指す状況の程度・規模があまり大きくないことを表したり、なんとなく、どこことなく、あるいは、わずかにそういう程度に達しているという意味を表す。

- (24) a. 小 高い (コダカイ)
 b. 小 寒い (コサムイ)
 c. 小 まめ (な) (コマメ)

次のような場合には、上の (24a)(24b)(24c) の例に見られるような意味に加えて、「軽蔑する」「軽んじる」「蔑む」「馬鹿にする」といったネガティブなニュアンス¹²、すなわち「軽蔑」の念とともに用いられることもある。

- (25) a. 小 汚い (コギタナイ)
 b. 小 憎らしい (コニクラシイ)
 c. 小 利口 (な) (コリコウ)

接頭辞「小-」は、特に数詞に対して用いられると、次の例のように、その数量・数値にはわずかに及ばないけれども、もう少しでその数値に届く、あるいはほぼその数値に近い、すなわち「近似値」という意味を表すことがある。

- (26) a. 小 一里 (コイチリ)
 b. 小 半年 (コハントシ)
 c. 小 一時間 (コイチジカン)

最後に、接頭辞「小-」が身体部分を表す身体語彙に対して用いられる場合、次の例のように、その身体語彙の「一部分」を指す語彙を形成する。

- (27) a. 小 指 (コユビ)
 b. 小 手 (コテ)
 c. 小 鼻 (コバナ)

次のような表現においては、「ちょっと」「わずかに」「少し」といったニュアンスを帯びた動作の表現を形成する場合がある。

- (28) a. 小 腹 (コバラ) がすく (= ちょっと腹がすく)
 b. 小 耳 (コミミ) にはさむ (= ちょっと耳にはさむ)
 c. 小 首 (コクビ) をかしげる (= ちょっと首をかしげる)

¹²中尾(2003: 223)によれば、日本語の「小」は、ロシア語とは異なり、「親愛」の意味よりも、「軽蔑」の意味を表す傾向がある。

このように、接頭辞としての「小-」は、それに後続する語句の意味成分(=コンテキスト)に応じて、接頭辞の意味も次のように変化すると見える:

後続する語句の意味	接頭辞「小-」としての意味
「人間」「動物」	「若い」「小さい」
「無生物」「自然現象」	「小さい」
「数詞」	「近似値」
「身体部分」	「一部分」
「形容詞」「形容動詞」	「小さい」「重要でない」「軽蔑」

3 エウエ語の -ví の意味・用法

ここでは、Heine *et al.* (1991) のデータをもとに、エウエ語の -ví の意味・用法について、日本語の「コ」と比較・対照しつつ、両言語の指小辞の意味・用法の共通点・相違点について見ていく。エウエ語の接尾辞 -ví は、Heine *et al.* (1991: 79) によれば、語彙的語から派生接尾辞へと変化する途上にある形態素であり、もともとは、「子供」という意味を表す語彙的語 ví' であった。

- (29) E: yevú-ví
 European-child 「ヨーロッパ人の子; 若いヨーロッパ人」
 J: ヨーロッパ人の 子
- (30) E: koklô-ví
 chicken-child 「鶏の子; ヒヨコ」
 J: ニワトリの 子

この点においては、日本語の接尾辞としての指小辞「-子」(あるいは接頭辞としての指小辞「子-」)も、語彙的語「子」から派生してきたものであり、エウエ語における -ví の意味変化と方向性が一部共通していると思われる (Heine *et al.* 1991: 79)。

3.1 「若い」「子孫」の意味の -ví

エウエ語の -ví は、次の (31E)(32E)(33E) の例のように「子供」の意味から派生した「若い」「幼い」「(～の)子孫」という意味¹³においても用いられる (Heine *et al.* 1991: 80)。

(31) E: ɲútsu 「男」 / ɲútsu-ví 「男の子」
J: 男 / 男の子

(32) E: nyónu 「女」 / nyónu-ví 「女の子」
J: 女 / 女の子

(33) E: yevú 「ヨーロッパ人」 / yevú-ví 「若いヨーロッパ人」
J: ヨーロッパ人 / ヨーロッパ人の子

この場合、日本語では、接辞ではなく語彙的語としての「子」が対応するが、上の (31J)(32J)(33J) の例のように、「～の子」という表現によって「若い」「子孫」という意味を表す。後で見るが、日本語もエウエ語のように「若い」および「子孫」という意味成分から「構成員」という意味も派生させており、この点に関しては、日本語とエウエ語はほぼ同じ道筋をたどっているように思われる。

また、このエウエ語の -ví は、次の例のように、「人間」だけでなく、「動物」の「子孫」に対しても適用される (Heine *et al.* 1991: 81)。

(34) E: nyi 「牛」 / nyi-ví 「子牛」
J: 牛 / 子牛 (コウシ)

(35) E: dzatá 「ライオン」 / dzatá-ví 「ライオンの子、幼獣」
J: ライオン / ?子ライオン (コライオン)

(36) E: to 「水牛」 / to-ví 「水牛の子、幼獣」
J: 水牛 / *子水牛 (コスイギユウ)

¹³ 「子孫」の意味のエウエ語の接尾辞 -ví には次のような用法もある (Heine *et al.* 1991: 84)。

(i) megbé 「後ろ」 / megbé-ví 「最後に産まれた」
(ii) ɲgɔ 「前」 / ɲgɔ-ví 「最初に産まれた」

- (37) E: koklô 「ニワトリ」 / koklô-ví 「ヒヨコ」
 J: ニワトリ / *子ニワトリ (コニワトリ)

この場合、日本語では、接頭辞「子-」(あるいは「仔-」)が対応するが、(34J)以外の言い方は一般的でない。(35J)のような外来の動物の名称における接頭辞「子-」を含む表現はあまり定着しているとは考えられず、同様な例として、「子ゴリラ」「子コアラ」などがある。上の(36J)(37J)の例のような表現は不自然で、特に(37J)については、「ヒヨコ」「ヒナドリ」といった別個の語彙が存在する。

さらに、このエウエ語の -ví は、「動物」だけでなく、次の例のように、「植物」の「子供」に対しても適用される (Heine *et al.* 1991: 82)。

- (38) E: akɔqúúí 「バナナの木」 / akɔqúúí-ví 「バナナの苗木」
 J: バナナの木 / バナナの*子木 (コキ) / *小木 (コキ) / *木子 (キコ)
- (39) E: detí 「アブラヤシの木」 / detí-ví 「アブラヤシの苗木」
 J: アブラヤシの木 / アブラヤシの*子木 (コキ) / *小木 (コキ) / *木子 (キコ)

日本語の場合、上の(38J)(39J)の例のような「子木」「小木」(コキ)という表現で対応させることはできないが、エウエ語での言い方に対応するものとして「苗木」(ナエキ)という語彙がある。しかし、日本語でも「子」と「小」は「植物」に対しても使用できる。例えば、日本語の「竹」に対する「竹の子」(タケノコ)や「芋」に対する「小芋」(コイモ)という表現がそうである。

3.2 「未経験」の意味の -ví

エウエ語の -ví は、ある種分野で人間が「未経験」「未熟」である、という意味も表す。例えば、次の例では、全く未経験のまま誰かが仕事に就いているような場合を表す (Heine *et al.* 1991: 81)。

- (40) E: núŋblá 「作家」 / núŋblá-ví 「未熟な作家」
 J: 作家 / *子作家 (コサッカ) / *小作家 (コサッカ) / *作家子 (サッカコ)

- (41) E: nufíalá 「教師」 / nufíalá-ví 「未熟な教師、新米教師」
 J: 教師 / *子教師 (コキョウシ) / *小教師 (コキョウシ) /
 *教師 子 (キョウシコ)

この場合、日本語の「子-」「-子」「小-」は、基本的には「未経験」「未熟」という意味で用いられることはないように思われる。例えば、(41E)に相当する日本語の表現は「未熟な教師」「新米教師」などであり、(41J)のような言い方はできないからである。さらに、エウエ語の -ví には、「未経験」「未熟」という意味から派生してきた「見習いの」「初心者の」という意味がある (Heine *et al.* 1991: 81)。

- (42) E: dɔyolá 「呪い師」 / dɔyolá-ví 「呪い師の見習い」
 J: 呪い師 / *子呪い師 (コマジナイシ) / *小呪い師 (コマジ
 ナイシ) / *呪い師 子 (マジナイシコ)
- (43) E: asitsalá 「商人」 / asitsalá-ví 「商人の見習い」
 J: 商人 / *子商人 (コショウニン) / *小商人 (コショウニン)
 / *商人 子 (ショウニンコ)

この場合、日本語には (43E) に対するものとして、「小商人」(コアキンド) という表現が存在するが、意味的には「小規模な商売を行う者」であり、エウエ語とは異なり「見習い」という概念は含まれない。日本語の「子-」「-子」「小-」には、基本的に「未経験」「未熟」という意味はない。しかし、「仏僧の見習い」という意味における「小坊主」「小僧」などの表現に「未経験」「半人前」「見習い」といったニュアンスを読み取ることができる。もっとも、これらの概念は、接頭辞「子-」ではなく「小-」で表される。

3.3 「不合格」の意味の -ví

エウエ語の -ví は、「未経験」「未熟」という意味から派生してきた「試験にまだ合格していない」、すなわち「不合格」という意味においても使用される (Heine *et al.* 1991: 81)。

- (44) βu' kulá 「運転手(車を運転する人)」 / βu' kulá-ví 「まだ試験に合格していないので運転免許証が取得できていない人」

この場合、日本語の指小辞「コ」には、「(試験に)不合格」という意味は基本的になく、上のエウエ語の例に相当する表現はない。エウエ語の表現と同じ意味で「子 運転手 / 小 運転手」(カウンテンシュ)「運転手 子」(ウンテンシュコ)などとは言えないからである。さらに、この意味におけるエウエ語の -ví は「不合格」という意味から、ある種の地位に到達すべく努力したが、「不成功」「失敗」に終わった人物、という意味¹⁴が派生している (Heine *et al.* 1991: 81)。

- (45) a. kesinotó 「金持ち」 / kesinotó-ví 「成り金 ; 本当には金持ちでない者」
 b. amegá 「長老」 / amegá-ví 「長老の如く振舞う者」

すでに見たように、(45a)には、日本語の「小 金持ち」(コガネモチ)という表現が対応する。「不成功」「失敗」という含みがあるかないかは別として、「成金」というネガティブなニュアンスで用いられることはあるからである。しかし、(45b)に対して、日本語では「子 長老 / 小 長老」(コチョウロウ)「長老 子」(チョウロウコ)などという言い方はできない。

3.4 「小さい」の意味の -ví

エウエ語の -ví には、「若い」「子孫」という意味から派生してきた「小さい」「小型」という意味があり、この意味で生物の分類学上の総称を指示するために用いられる場合、次の例のように、もはや「若い」「幼い」という意味を表さなくなる (Heine *et al.* 1991: 82)。

- (46) E: lá 「動物」 / lá-ví 「小型の種類動物」
 J: 動物 / *子 動物 (コドウブツ) / *小 動物 (コドウブツ) / *動物 子 (ドウブツコ)
- (47) E: dá 「蛇」 / dá-ví 「小型の種類蛇」
 J: 蛇 / *子 蛇 (コヘビ) / *小 蛇 (コヘビ) / *蛇 子 (ヘビコ)

¹⁴ この場合のコンテキストでは、頻度は高くないが、接尾辞 -ví は「無愛想な」「ぶっきらぼうな」というニュアンスを帯びることもある。これらの意味は日本語の「コ」にはない。

- (48) E: abɔɔ 「蝸牛」 / aɔɔ-ví 「小型の種類の蝸牛」
 J: カタツムリ / *子 蝸牛 (コカタツムリ) / *小 蝸牛 (コカタツムリ) / *蝸牛 子 (カタツムリコ)
- (49) E: núdzodzoe 「昆虫」 / núdzodzoe-ví 「小型の種類の昆虫」
 J: 昆虫 / *子 昆虫 (ココンチュウ) / *小 昆虫 (ココンチュウ) / *昆虫 子 (コンチュウコ)
- (50) E: akpa 「魚」 / akpa-ví 「小型の魚」
 J: 魚 / *子 魚 (コザカナ) / 小 魚 (コザカナ) / *魚 子 (サカナコ)
- (51) E: xeví 「鳥」 / xeví-ví 「小型の種類の鳥」
 J: 鳥 / *子 鳥 (コトリ) / 小 鳥 (コトリ) / *鳥 子 (トリコ)

この場合、日本語では接頭辞「小-」が対応するが、上の(46J)(47J)(48J)(49J)の例のような言い方はできない。もっとも、(46J)については「小 動物」(ショウドウブツ)という言い方が存在するが、これは「小-」(コ-)とは別の形態素である接頭辞「小-」(ショウ-)を用いた表現である。

また、「小さい」「小型」の意味におけるエウエ語の -ví が「人」「人間」という意味の ame について用いられた場合、ame-ví は、「背の低い人」「小柄な人」という意味を表すが、大部分の場合、-ví は「無生物名詞」と用いられ、「小さい」「小型」の意味を表す指小辞¹⁵である (Heine *et al.* 1991: 83)。

- (52) E: kpé 「石」 / kpé-ví 「小さい、小型の石」
 J: 石 / *子 石 (コイシ) / 小 石 (コイシ) / *石 子 (イシコ)

¹⁵ エウエ語の接尾辞 -ví は、同語の形容詞 sue´ 「小さい」と意味・機能的に次のように異なる (Heine *et al.* 1991: 83):

- (i) zikpui 「いす」 / zikpui sue´ 「小型のいす」 / zikpui-ví 「子供用のいす」
 (ii) hɛ´ 「ナイフ」 / hɛ´ sue´ 「通常のナイフより短いナイフ」 / he-ví 「剃刀のような小型のナイフ」
 (iii) βu´ 「太鼓」 / βu´ sue´ 「小型の太鼓」 / βu´-ví 「脇の下で抱えるような小型の太鼓」

- (53) E: du 「村、町」 / du-ví 「小さい村」
 J: 村 / *子村(コムラ) / *小村(コムラ) / *村子(ムラコ)

- (54) E: xo 「家」 / xo-ví 「小さい家」
 J: 屋 / *子屋(コヤ) / 小屋(コヤ) / *屋子(ヤコ)

この場合、日本語では、(52E)に対して(52J)の「小石」(コイシ)という表現が対応するが、(53E)に対する「子村 / 小村」(コムラ)、「村子」(ムラコ)という言い方はない。あまり一般的ではないが「小村」(ショウソン)という言い方があるだけである。このように、「小さい」「小型」の意味における -ví に対しては、接頭辞「小-」が対応し、接頭辞「子-」と接尾辞「-子」は対応していない。

3.5 「あまり目立たない」の意味の -ví

エウエ語の -ví は、身体語彙に対して用いられた場合、主要部が表す身体部分よりも「小さい」あるいは「あまり目立たない」身体部分を表すことがある (Heine *et al.* 1991: 83)。

- (55) a. alb 「腕の下の方」 / alb-ví 「指」
 b. afɔ 「足、脚」 / afɔ-ví 「足指、爪先」
 c. ŋkú 「目、眼」 / ŋkú-ví 「瞳、瞳孔」

この場合、日本語では、「子-」「-子」「小-」のいずれにもエウエ語の接尾辞 -ví のような意味・機能は基本的にないが、数少ない例として、「鼻」に対する「小鼻」(コバナ)、「指」に対する「小指」(コユビ)のような表現¹⁶がこれにあてはまるであろう。

3.6 「重要でない」の意味の -ví

エウエ語の -ví は、認識できなかつたり、眼に見えなかつたりする存在物に対して用いられる場合、「小さい」「小型」の意味から派生してきたと思われる「重要でない」「弱い」「無害な」といった意味を表すことがある (Heine *et al.* 1991: 83)。

¹⁶ 「耳」に対して「小耳」(コミミ)、「手」に対して「小手」(コテ)という言い方が存在するが、意味的には異なる。

- (56) E: gbe 「声」 / gbe-ví 「弱々しい、かすかな声」
 J: 声 / *子声(コゴエ) / 小声(コゴエ) / *声子(コエコ)
- (57) E: ya 「風」 / ya-ví 「微風、そよ風」
 J: 風 / *子風(コカゼ) / *小風(コカゼ) / *風子(カゼコ)

日本語の場合、(56E)に対応する表現として、まさに(56J)のような「小声(コゴエ)」という表現が存在する。しかし、(57E)に対しては、「微風」「そよ風」といった表現が対応するが、(57J)のような「子風 / 小風(コカゼ)あるいは「風子」(カゼコ)という表現は存在しない。

同じく、エウエ語の -ví は、「小さい」の意味から派生してきたと思われる「取るに足らない」「つまらない」「ささいな」「意味のない」という意味を表すことがある (Heine *et al.* 1991: 84)。

- (58) E: do 「病気、病」 / do-ví 「(風邪のような) ちょっとした患
 い」
 J: 病気 / *子病気(コビョウキ) / *小病気(コビョウキ) /
 *病気子(ビョウキコ)
- (59) E: nya 「事がら、ことば」 / nya-ví 「取るに足らないこと、小
 さなこと」
 J: 事(コト) / *子事(ココト) / *小事(ココト) / *事子
 (コトコ)

日本語の場合、(58E)に対応する表現として、「子病気 / 小病気(コビョウキ)、「病気子」(ビョウキコ)のような表現は存在しない。また、(59E)に対応する表現としては「小事(ショウジ)が最もぴったりとあてはまると思われるが、「ショウジ」を意味する「コゴト」や「コトコ」のような表現は日本語にはない。「重要でない」「弱い」「無害な」という概念については、次のような表現に「ささいな、たいした程度ではない」といったニュアンスが読み取れるかもしれない。

- (60) a. 小金(コガネ)
 b. 小者(コモノ)
 c. 小役人(コヤクニン)

3.7 「本当の」の意味の -ví

しかし、次のように、エウエ語の -ví が、日本語の接頭辞「小-」のように、必ずしも「程度が軽い」という意味を表していない場合がある (Heine *et al.* 1991: 79)。

- (61) E: keisinotó 「裕福な人」 / keisinotó-ví 「本当に裕福でない人；成り金」
 J: 金持ち / *子金持ち (コガネモチ) / 小金持ち (コガネモチ) / *金持ち子 (カネモチコ)
- (62) E: amedáhe 「貧しい人」 / amedáhe-ví 「本当に貧しい人；惨めな人、哀れな人」
 J: 貧乏 / *子貧乏 (コピンボウ) / *小貧乏 (コピンボウ) / *貧乏子 (ピンボウコ)

上の (61E) の例は、主要部の名詞に -ví が付くことによって、文字通り日本語の「小金持ち」「成り金」といった意味を表す。これに対して、(62E) は、主要部の名詞に -ví が付いても、「程度が軽い貧乏」という意味を表していない。逆に、「極貧」といったニュアンス¹⁷を持った表現に変化している。日本語の場合は、「金持ち」に対して「小金持ち」といった表現はあっても、「貧乏」に対して「小貧乏」という表現は存在しない。

3.8 「一部分」の意味の -ví

最後に、「小さい」から派生してきたと思われるエウエ語の -ví の意味としては「(何かのかたまりから切り取られた)一部分」というのがある (Heine *et al.* 1991: 84)。

¹⁷ 次のような例からも、接尾辞 -ví が常に「程度が軽い」という意味を表すとは限らないということがわかる (Heine *et al.* 1991: 80)。

- (i) Kofi nyé amedáhe gaké mé-nyé amedáhe-ví o
 Kofi be poor but NEG.3SG-be poor- NEG
 「Kofi は貧しい男だが、哀れむほどではなく、極端に貧しいわけではない」
- (ii) Mensa nyé kesinotó akúakú, ésiatáé mé-nyé kesinotó-ví o
 Mensa be rich genuinely therefore NEG.3SG-be rich- NEG
 「Mensa は本当に裕福であり、金持ちのふりをしているのではない」

- (63) a. súkli 「砂糖」 / súkli-ví 「角砂糖、砂糖のかけら」
 b. núnono 「飲み物」 / núnono-ví 「一口分の飲み物、水分」
 c. dzidzo 「幸福、喜び」 / dzidzo-ví 「(限られた状況での)喜び、楽しみ」

日本語の場合、「子-」「-子」というよりもむしろ「小-」によって「一部分」という意味が表されるように思われるが、上の(63a)の例に対応する日本語の表現は「角砂糖」(カクザトウ)であり、「子砂糖 / 小砂糖」(コサトウ)、「砂糖子」(サトウコ)などという言い方はない。この意味に関しては、すでに述べたように、日本語の「子-」「-子」「小-」には基本的にそのような概念は含まれないが、「小銭」(コゼニ)という表現にそのニュアンスが読み取れるかもしれない。

3.9 「構成員」の意味の -ví

エウエ語の -víの高度に生産的な用法として、政治的、社会的、文化的、あるいは地理的に限定された共同体・コミュニティの中における「構成員」¹⁸を指示する用法がある (Heine *et al.* 1991: 85)。

- (64) a. Eβe 「エウエ」 / Eβe-ví 「エウエ人」
 b. du(me) 「村」 / dume-ví 「村の原住民」
 c. pome 「血縁、血族関係」 / pome-ví 「親類、親戚」

日本語の場合、接尾辞「-子」に「ある場所や時代に生まれ育った人物」、すなわち「構成員」という意味があり、特に、上の(64a)に非常によく対応する例として次のような表現がある。これらの日本語の表現にも「生ま

¹⁸この用法は、「親」対「子」という意味の対立が類推によって「共同体」対「個人」という関係に置き換えられたため生じた、と考えられる。また、この用法における接尾辞 -víには、「生まれも育ちもその共同体の一員」という含みがあり、類似した意味を担う接尾辞 -tś (語源は、「父親」とは対照的である (Heine *et al.* 1991: 84-85)。

- (i) Tógó-ví 「生まれながらの、生粋のトーゴ人」
 (ii) Tógó-tś 「トーゴの住人」
 (iii) Dzáma-ví 「生まれながらの、生粋のドイツ人」
 (iv) Dzáma-tś 「ドイツの住人 (生まれはトルコ人やイタリア人であることもあり得る)」

れも育ちも」「生粋の」という含み¹⁹があり、エウエ語と類似している。

- (65) a. 江戸 / 江戸っ子 (エドッコ)
 b. 都会 / 都会っ子 (トカイッコ)
 c. 現代 / 現代っ子 (ゲンダイッコ)

3.10 「典型的な行動様式」の意味の -ví

エウエ語の -ví には、「構成員」の意味から派生してきた「典型的な行動様式」という意味がある。つまり、ある種の集団の「構成員」には、その集団の「典型的な行動様式」にこだわるものである、という含意があるからである (Heine *et al.* 1991: 85-86)。

- (66) a. amedzró 「外人、外国人、異邦人」 / amedzró-ví 「外人の如く振る舞う人物」
 b. amedáhe 「貧乏人」 / amedáhe-ví 「哀れな人物、貧しく同情と哀れみをかけてもらうのに値するが故に苦悩する人物」
 c. ameyiboo 「黒人」 / ameyiboo-ví 「典型的なアフリカ人の行動様式を示す人物、アフリカの価値観に固執する人物」

これらの表現に対応する日本語の表現としては、接尾辞「-子」によって「典型的な行動様式」のようなニュアンスを表しうると思われるが、上の (66a) については、日本語では「外人」に接尾辞「-子」を付けて、「外人子」(ガイジンコ) という言い方はできないし、接頭辞「子-」「小-」を付けて「子外人 / 小外人」(コガイジン) のような言い方もできない。(66b)(66c) についても事態は同じである。

日本語の場合、次のような表現に「典型的な行動様式」すなわち、「特定の場所に生まれ育った人の、特定の時代に生まれ育った人の」といったニュアンスが読み取れるであろう。

¹⁹ エウエ語で次のように言う場合、それは生粋のトーゴ人を指す (Heine *et al.* 1991: 85):

é-nyé Tógó-ví

3SG-be Togo- 「彼は(生まれも育ちも)トーゴ人だ」

すなわち、生まれも育ちもトーゴであり、その振舞い方が典型的なトーゴ人のそれと合致するような人物を上記の文は指しているのである。この点、日本語の「江戸っ子」という表現は、エウエ語の Tógó-ví 「トーゴっ子」と性格を一にしている。

- (67) a. 東京 / 東京っ子 (トウキョウツコ)
 b. 団地 / 団地っ子 (ダンチツコ)
 c. 大正 / 大正っ子 (タイショウツコ)

ただし、これらの例は、「典型的な行動様式」という意味も担いつつ、同時に上の(65a)(65b)(65c)の例にも含まれる「構成員」の意味も担っている、と考えることができる。

4 おわりに

本論では、日本語の指小辞「コ」とエウエ語の指小辞 -ví に関して、対照言語学と文化化の視点から考察した。日本語の「子-」「-子」とエウエ語の -ví は、共に「子供」を意味する語彙的語に由来するものであるが、両言語の指小辞が持つ多種多様な意味は、基本的には、「子供」という意味の名詞に含まれる「若い」および「子孫」という二つの意味成分から派生してきたものと思われるが、これまでの考察をまとめて、両言語の指小辞の概念上の共通点および相違点を表にして整理してみれば次のようになるであろう。

指小辞 意味成分	コ1(子-)	コ2(-子)	コ3(小-)	-ví
子供・子孫・若い	+	+	-	+
小さい	+	-	+	+
構成員・典型的な行動様式	-	+	-	+
未経験・重要でない・取るに足らない・一部分	-	-	+	+
派生・従属	+	-	-	-
従事者・道具・部品・甘えた・親愛の情	-	+	-	-
軽蔑・近似値	-	-	+	-
不合格・不成功・あまり目立たない・本当の	-	-	-	+

日本語の指小辞「コ」の場合、エウエ語の指小辞 -ví とは異なり、接頭辞「子-」、接尾辞「-子」、接頭辞「小-」という三つの形態素が存在し、「若い」「子孫」「構成員」という具象度の高い基本的概念については、「子-」「-子」で表されることが多く、「若い」および「子孫」から派生してきた

比較的抽象度の高い概念については、文法化された「小-」で表現されることが多いように思われる。すでに触れたように、「子」と「小」が共通の語源を持つかどうかについては、定説がないようであるが、国語辞書においても「子」と「小」が別個の見出し語として立てられていることから、「子」から「小」の意味が派生してきたと考えるよりも、比較的具象度の高い概念を「子-」「-子」によって具現化し、これに対して、比較的抽象度の高い概念を「小-」によって具現化しているのとらえておくべきであろう。

最後に、日本語とエウエ語は、系統論的にも、言語構造的にも互いに非常に異なる言語である。それにもかかわらず、両言語における「子供」という意味の語彙的語が意味論的に非常に似通った振る舞いをしているという事実は非常に興味深い。細部を見れば異なる点もあるが、「子供」という意味を表す語彙的語が文法化してゆく過程と方向性が日本語とエウエ語とで大筋においては共通しているのも非常に興味深い。しかしながら、両言語の指小辞の意味・機能の拡張のパターン、文法化の程度の詳細については、検討すべき問題も多いので、これらは今後の課題としたい。

【参考文献】

- Heine, B., U. Claudi and F. Hünemeyer (eds.) (1991) *Grammatization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hopper, P.J. and E.C. Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jurafsky, D. (1996) 'Universal Tendencies in the Semantics of the Diminutive,' *Language* 72;3: 533-578.
- 亀井孝・他 (1996) 『言語学大辞典』(第6巻 述語編) 東京: 三省堂
- Katzner, K. (1975) *The Languages of the World*. New York: Funk & Wagnalls.
- Matthews, P.H. (1997) *Oxford Concise Dictionary of Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- 皆島博 (2002) 「エウエ語の-víと日本語の『コ』」『福井大学教育地域科学部紀要(第I部人文科学編)』58: 9-23.

- 中尾裕子(2003)「指小語(diminutive)について 日本語とロシア語の対照研究」『日本言語学会(第126回大会予稿集)』、220-225.
- 日本大辞典刊行会・編(1974)『日本国語大辞典』(第7巻)東京:小学館
- Trask, R.L. (1997) *A Student's Dictionary of Language and Linguistics*. London: Arnold.
- Westermann, D. (1907) *Grammatik der Ewe-Sprache*. Berlin: Dietrich Reimer.

Japanese Diminutive *ko* and Ewe Diminutive *-ví* — A Contrastive Study —

Hiroshi MINASHIMA

In the present study, I will show a contrastive study between Japanese diminutive *ko* and Ewe diminutive *-ví*. The diminutives of both languages are derived from the lexical word meaning “child” in each language, which had developed into the diminutives through the process of grammaticalization. The diminutives of both languages show a significant correspondence in some part of their meanings and functions (Heine *et al.* 1991:79).

- (i) Japanese: yooroppa jin-no *ko*
 Ewe: yevú-*ví*
 European-child “young European”

- (ii) J: ishi *ko*-ishi
 E: kpé “stone” kpé-*ví* “small stone”

In the following cases, however, the diminutives of both languages do not show a perfect correspondence in their meanings and functions (Heine *et al.* 1991:79).

- (iii) J: kanemochi *ko*-ganemochi
 E: keisinotó “rich person” keisinotó-*ví* “a parvenu, somebody who is not really rich”
- (iv) J: binboonin **ko*-binboonin
 E: amedáhe “poor person” amedáhe-*ví* “a truly poor, deplorable person”

As mentioned above, what is interesting about diminutives of Japanese *ko* and Ewe diminutive *-ví* is that they show similarities in many ways, although both languages are quite different from each other in terms of genealogy and

linguistic structures. The purpose of the present paper is, therefore, to investigate the similarities and differences between the diminutives of both languages, including the view point of grammaticalization and semantic universality.

minasima@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp